

主 題：見える人が見えなかった光

聖書箇所：ヨハネの福音書9章13-41節

先週からヨハネ9章を見始めましたけれども、きょうは残りの13-41節を一緒に学んでみたいと思います。

ただその内容に入る前に少し考えてみてください。今から約50年前となる1977年、スペインのテネリフェ島にあって歴史上最悪の航空事故が起こりました。この事故は滑走路上で2機のジャンボ機が衝突し、実に死者583名を出す大惨事でした。いったいどうしてこんな事故が起こったのでしょうか。その理由は今でもいろいろと言われてはいますが、大きな要因だったのは濃い霧によって視界が悪かったこと、そして何より機長がその中で自分の判断を正しいと思い込んだことでした。この時操縦していたベテランの機長は、ほかの乗組員から別の飛行機がまだ滑走路にありますと警告されました。にもかかわらず滑走路は空いていると判断して、警告を無視し、離陸を試みたことで悲惨な結果を伴うことになったのです。もし本当に自分の判断が正しいのか、大丈夫だろうかと一度立ち止まっていたら、もし自分が見えていないかもしれないと周りの声に耳を傾けていたとしたら、事故は防げたかもしれません。実際は見えていないのに、自分が見えていると思い込んでしまうこと、それはいかなる場面においても非常に危険な状態でした。

○目が開かれた盲人と盲人だったパリサイ人：四つのキーワード

そしてきょう私たちがこれから見ていく箇所にも同じような危険が描かれています。今回の箇所に登場するパリサイ人たちはまさにそのような人たちでした。彼らは自分たちこそが見えている、わかっていると思い込んでいた者たちでした。でも現実はその真逆でした。彼らはどこまでいっても霊的に盲目な者でした。盲目な彼らは自分たちの本当の姿というものが見えていませんでした。そしてこれは今の時代でも何ら変わっていません。盲目さの一つの大きな厄介な問題は、盲目な者は自分が盲目だということに気づくことが難しいということです。ではどうやって気づけるのか、みことばがそのことを教えていました。これから私たちは実際に見えていない盲目さというものがどんな状態なのか、パリサイ人のうちにそれを見て取ることができます。盲目な者はどんな歩みをするのか、そのことによく目を留めてみましょう。そしてその逆に、見えるようになった者はどのようにして生きていくことができるのか、そのことについても一緒に考えてみましょう。

きょうは四つのキーワードを中心に、この13-41節の話を考えてみたいと思います。

ヨハネ9：13-41

「:13 彼らは、前に盲目であったその人を、パリサイ人たちのところに連れて行った。:14 ところで、イエスが泥を作って彼の目をあけられたのは、安息日であった。:15 こういうわけでもう一度、パリサイ人も彼に、どのようにして見えるようになったかを尋ねた。彼は言った。「あの方が私の目に泥を塗ってくださって、私が洗いました。私はいま見えるのです。」:16 すると、パリサイ人の中のある人々が、「その人は神から出たのではない。安息日を守らないからだ」と言った。しかし、ほかの者は言った。「罪人である者に、どうしてこのようなしるしを行うことができよう。」そして、彼らの間に、分裂が起こった。:17 そこで彼らはもう一度、盲人に言った。「あの方が目をあけてくれたことで、あの人を何だと思っているのか。」彼は言った。「あの方は預言者です。」:18 しかしユダヤ人たちは、目が見えるようになったこの人について、彼が盲目であったが見えるようになったということを信ぜず、ついにその両親を呼び出して、:19 尋ねて言った。「この人はあなたがたの息子で、生まれつき盲目だったとあなたがたが言っている人ですか。それでは、どうしていま見えるのですか。」:20 そこで両親は答えた。「私たちは、これが私たちの息子で、生ま

れつき盲目だったことを知っています。:21 しかし、どのようにしていま見えるのかは知りません。また、だれがあれの目をあけたのか知りません。あれに聞いてください。あれはもうおとなです。自分のことは自分で話すでしょう。」:22 彼の両親がこう言ったのは、ユダヤ人たちを恐れたからであった。すでにユダヤ人たちは、イエスをキリストであると告白する者があれば、その者を会堂から追放すると決めていたからである。:23 そのために彼の両親は、「あれはもうおとなです。あれに聞いてください」と言ったのである。:24 そこで彼らは、盲目であった人をもう一度呼び出して言った。「神に栄光を帰しなさい。私たちはあの人が罪人であることを知っているのだ。」:25 彼は答えた。「あの方が罪人かどうか、私は知りません。ただ一つのことだけ知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということです。」:26 そこで彼らは言った。「あの人はおまえに何をしたのか。どのようにしてその目をあけたのか。」:27 彼は答えた。「もうお話ししたのですが、あなたがたは聞いてくれませんでした。なぜもう一度聞こうとするのです。あなたがたも、あの方の弟子になりたいのですか。」:28 彼らは彼をののしって言った。「おまえもあの者の弟子だ。しかし私たちはモーセの弟子だ。:29 私たちは、神がモーセにお話しになったことは知っている。しかし、あの方については、どこから来たのか知らないのだ。」:30 彼は答えて言った。「これは、驚きました。あなたがたは、あの方がどこから来られたのか、ご存じないと言う。しかし、あの方は私の目をおあけになったのです。」:31 神は、罪人の言うことはお聞きになりません。しかし、だれでも神を敬い、そのみこころを行うなら、神はその人の言うことを聞いてくださると、私たちは知っています。:32 盲目に生まれついた者の目をあけた者があるなどとは、昔から聞いたこともありません。:33 もしあの方が神から出ておられるのでなかったら、何もできないはずですよ。」:34 彼らは答えて言った。「おまえは全く罪の中に生まれていながら、私たちを教えるのか。」そして、彼を外に追い出した。:35 イエスは、彼らが彼を追放したことを聞き、彼を見つけ出して言われた。「あなたは人の子を信じますか。」:36 その人は答えた。「主よ。その方はどなたでしょうか。私がおの方を信じることができますように。」:37 イエスは彼に言われた。「あなたはその方を見たのです。あなたと話しているのがそれです。」:38 彼は言った。「主よ。私は信じます。」そして彼はイエスを拝した。:39 そこで、イエスは言われた。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。それは、目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」:40 パリサイ人の中でイエスとともにいた人々が、このことを聞いて、イエスに言った。「私たちも盲目なのですか。」:41 イエスは彼らに言われた。「もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、あなたがたは今、『私たちが目が見える』と語っています。あなたがたの罪は残るのです。」

1. かたくなさ 13-23節

では早速一つ目のキーワードから考えてみましょう。一つ目の場面を考える上で鍵となることばは、かたくなさです。イエス様の行った信じられないほどのみわざを目の当たりにしながら、人々はあまりにもかたくなでした。13節はこんなふうに始まっていました。「:13 彼らは、前に盲目であったその人を、パリサイ人たちのところに連れて行った。:14 ところで、イエスが泥を作って彼の目をあけられたのは、安息日であった。:15 こういうわけでもう一度、パリサイ人も彼に、どのようにして見えるようになったかを尋ねた。彼は言った。「あの方が私の目に泥を塗ってくださって、私が洗いました。私はいま見えるのです。」:16 すると、パリサイ人の中のある人々が、「その人は神から出たのではない。安息日を守らないからだ」と言った。しかし、ほかの者は言った。「罪人である者に、どうしてこのようなしるしを行うことができよう。」そして、彼らの間に、分裂が起こった。」と。

▶「尋ねた」

さて、普段であればさっと読み流して終わるかもしれませんが、改めてこの場面、不思議だと思いませんか。物乞いをしていた盲目だった人は、そんな以前の姿を覚えていた人たちによって、パリサイ人の元へと連れてこられました。パリサイ人の目の前には、生涯何も見たことがなかったにもかかわらず、今見えるようになった、そんな人が実際にいたのです。本来だったら、「いやされてよかったね」、「すごい

ことが起こったんだ」と驚きや感動を分かち合うべきことでした。でも彼らはここで喜びではなく憤りをあらわにしていました。15節に「こういうわけでもう一度、パリサイ人も彼に、どのようにして見えるようになったかを尋ねた。」と書いていました。ここで「尋ねた」と言われていましたが、これは単に彼らが興味本位で質問しましたということではありません。彼らは目の前に連れてこられた人に興味を抱いて、どうやってその目が開いたのかということに純粋に関心があったのではありません。この「尋ねた」ということばには、過去における動作の繰り返しを表す動詞の形が使われていました。つまり言い換えれば、パリサイ人というのはこの時盲目だった人にどうやってあいたのですかと、1回だけ聞いていたのではありません。パリサイ人は目の前に連れてこられた盲目だった人に、まるで捕まった犯罪者を尋問するかのように、何度も何度も執拗に問い続けていたのです。

でもなぜ彼らは、いやされた手段を何とかして突き止めようとしていたのでしょうか。その行動の背後にあったある事実が14節にはっきりと記されていました。「ところで、イエスが泥を作って彼の目をあけられたのは、安息日であった。」と書いています。どうして彼らが憤りを覚えていたのかというと、それはイエス様が盲目な人の目をいやしたのが安息日だったからでした。この安息日というのは、この日自体は最初から確かに特別な日として扱われてきました。神様の民は、神様が創造の働きを6日で終えた後、7日目に休まれたことを覚えて、自分たちも休むことが求められていました。昔から人々は7日目を聖なる日として守って、その日は仕事や日常生活を横に置いて、ただ主に礼拝を捧げて、主のうちにあって喜びや満足、休息を見いだす日とし続けてきたのです。彼らにとってその日はすばらしい日でした。でもそんな祝福であった日を、パリサイ人たちは次第に重荷へと変えていきました。彼らは安息日を破らないということに心を留めて、そのために神様のことばに付け加えて、独自のルールまで定め始めていたのです。以前にも紹介しましたが、あるユダヤ人の文献の中には、彼らが特に安息日にしてはならないと定めていた働きが39個載っていました。今回の場面で、何が違反していたのか想像してみてください。こう書いています。「主な労働の種類は……種を蒔くこと、耕すこと、刈り取ること、束ねること、脱穀すること、風選すること、穀物をきれいにすること、挽くこと、ふるいにかけること、こねること、焼くこと、羊毛を刈ること、羊毛を洗うこと、紡ぐこと、織ること、二つの輪を作ること、二つの糸を織ること、二つの糸を分けること、結ぶこと、解くこと、二針縫うこと、二針縫うために裂くこと、野獣を狩ること、それを屠ること、皮を剥ぐこと、塩漬けにすること、皮をなめすこと、皮を削ること、切り分けること、二文字書くこと、二文字書くために消すこと、建てること、取り壊すこと、火を消すこと、火をつけること、金槌で打つこと、一つの場所から別の場所へ物を運ぶこと。」と。今回の場面で違反にあたる部分は10番目に出てきていた「こねること」でした。イエス様が地面につばきをして、そこでこねて作った泥を、盲人に塗っていやしたということは、彼らの目からすれば到底許せないことでした。

また加えてこの当時、安息日にだれかをいやすという行為自体も禁じられていたものでした。今では考えられないかもしれませんが。でもこの当時は、いのちの危険に関わる場合を除いて、人々はどんな痛みを負っていたとしても、安息日の次の日まで治療を待たなければいけなかったのです。それゆえに、盲目な人を目の前にした時、パリサイ人たちの関心は、盲人がいやされたというその驚きの事実にはいっさいありませんでした。彼らの関心は、自分たちが憎んでいるイエス様を訴えるために、安息日を破ったという証拠を集めることにあったのです。だから盲人の返事を聞いた彼らは、口々に彼自身のことではなく、すぐイエス様のことを議論していました。15節のところで、どうやって見えるようになったのですかと尋ねて、盲人が答えた後、16節で「その人は神から出たのではない。安息日を守らないからだ」、「罪人である者に、どうしてこのようなしるしを行うことができよう。」と言っています。彼らの関心は残念ながら目の前にあるすばらしい奇蹟、神様のみわざではありませんでした。彼らは自分たちを正しいとし、すなおに真理を受け入れることではなく、別のことに心がとらわれていたのです。目の前に示されていただれが見ても明らかなみわざに気づくことがありませんでした。彼らはあまりにもかたくなだったので

す。

そしてそんなかたくなだった彼らは盲目だった本人のことばでは満足せずに、彼の両親まで呼び出していました。18節に彼らのかたくなさがさらに明らかにされます。「:18 しかしユダヤ人たちは、目が見えるようになったこの人について、彼が盲目であったが見えるようになったということを信ぜず、ついにその両親を呼び出して、:19 尋ねて言った。「この人はあなたがたの息子で、生まれつき盲目だったとあなたがたが言っている人ですか。それでは、どうしていま見えるのですか。」:20 そこで両親は答えた。「私たちは、これが私たちの息子で、生まれつき盲目だったことを知っています。:21 しかし、どのようにしていま見えるのかは知りません。また、だれがあれの目をあけたのか知りません。あれに聞いてください。あれはもうおとなです。自分のことは自分で話すでしょう。」と。パリサイ人のその質問に対して、両親たちははっきりと答えました。あなたたちが言っているこの人物、あなたたちの前に連れて来られたその人物は私たちの息子です、そして私たちは彼が生まれつき盲目であったことを知っていますと。この時点で、彼らはもう議論をやめて、真理を受け入れるべきでした。連れてこられた人が確かに生まれつき盲目で、今見えるようになったというこの奇蹟に目を留めて、それを可能にしたイエス様の前に悔い改めて、神の御子として信じ、受け入れるべきでした。イエス様がなしたことは、だれの目が見ても、神にしかできないみわざだったのです。

それでもなお彼らは真理を受け入れようとしませんでした。かたくなだった彼らは、この後も変わらずに同じ質問をしています。26節「あの人はおまえに何をしたのか。どのようにしてその目をあけたのか。」と。パリサイ人たちはかたくなでした。こんな彼らの姿から私たちは一つのことを学ぶことができます。それは自分は正しいと思い込んでいる人の心は、真理を受け入れることをかたくなに拒むということです。自分が正しい、自分は間違っていない、自分は大丈夫だと思い込んでいる人たちの高慢な心は、真理をすなおに受け入れることを拒むということです。信じたくない人というのは、いくら確実な証拠を提示したとしても信じようとはしません。むしろ信じないでいられる理由を探そうとします。たとえば生涯盲目な人がいやされて、歩けなかった人が目の前で歩けるようになった奇蹟を見れば、確実にイエス様やそのことばを信じるようになるのでしょうか——。残念ながらそうはなりません。奇蹟のすごさに感動することはできます。奇蹟のすごさに喜ぶこともできます。世の光であるイエス様を信じることには、常に自分の罪深さを認めて、自分のすべてを捨てて従っていくことが問われるからです。だからパリサイ人は真理を見られなかったのです。

考えてみてください。彼らは自分たちこそ正しい良い人物だと信じて疑うことはありませんでした。彼らは聖書の知識も持っていたし、伝統にも熱心だったし、宗教にも励んでいたからこそ、自分たちこそが救われていて、自分たちこそが御国を受け継ぐのにふさわしいと自負していました。そうやって誇り高ぶっていたのです。そしてそんな彼らがイエス様から「あなた方は間違っています、自分勝手なその正しさを捨てて、救いのために私を信じるように」と告げられた時に、その現実を受け止めることができなかつたのです。自分たちの正しさを捨てることができなかつたのです。高慢だった彼らは光が明らかにする自分の罪深さをすなおに認めることができなかつたのです。

そして盲目な人は真理をすなおに受け入れるのではなく、真理を受け入れずに済むように、真理を攻撃するのです。まさにみことばの言うとおりでした。同じヨハネ3:20でも「悪いことをする者は光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。」と言われています。暗やみの中を愛している者は、光が照らされようが、暗やみの中にとどまることを願いました。どれだけ目の前で奇蹟が見えたとしても、光を愛し、光に従うことを拒むのです。これが神様に逆らう罪人のかたくなさでした。自分は見えていると思っている者は、残念ながらあまりにも真理に対して盲目だったのです。

2. 勇敢さ 24-34節

二つ目の場面を考える上で鍵となることばは勇敢さです。今度はパリサイ人ではなく、盲目だった人に焦点を置きたいと思います。見えるようになった盲目な人は、真理に対していつまでも盲目なパリサ

イ人との間に大きな闘いを経験しました。

▶「神に栄光を帰しなさい」

24節でパリサイ人たちはまた彼に対して高慢な態度で迫っていました。「そこで彼らは、盲目であった人をもう一度呼び出して言った。「神に栄光を帰しなさい。私たちはあの人が罪人であることを知っているのだ。」とあります。ここに「神に栄光を帰しなさい」ということばが出てきました。これを読んで、「神様を賛美しましょう」、そんな意味で言っているのかと思った人がいるかもしれません。でもこのことばは、そのようなものではありません。このことばは、裁判官が法廷に立たされた人に向かって自分のしたことを神の前で正直に告白しなさいと求めるようなことばでした。裁判の中で使われるようなことばだったのです。実際、これと同じことばは、ヨシュア記7章で、アカンという人に対しても用いられました。エリコの町に攻め込む前、神様はイスラエルの民たちに、その町にある金や銀、青銅の器などは私のものであるからあなたたちはそれに決して手を出してはいけなと命じていました。しかし、その町に入った時、アカンはその命令に逆らって、隠れて主のものを盗んだ結果、神様の怒りが民全体に下ることになりました。そしてその後、民を率いていたヨシュアがアカンを見つけて、こう告げるのです。ヨシュア7：19「そこで、ヨシュアはアカンに言った。「わが子よ。イスラエルの神、【主】に栄光を帰し、主に告白しなさい。あなたが何をしたのか私に告げなさい。私に隠してはいけな。」」と書いています。ヨシュアが求めていたことは、神と人との前にあって自分の過ちを認めて、犯した罪を告白しなさいということでした。「神に栄光を帰しなさい」、これと同じことばが今回の箇所にも使われました。パリサイ人は公正な証言を求めたわけではありません。イエス様が罪人だとはなから決めつけていた彼らは、盲人だった人がイエス様は罪人だと、イエス様は神様から来た者ではないと賛同するように求めたのです。彼らが持っていたその立場を同じように支持するようにと圧力をかけていたのです。

ここで少し立ち止まって、彼の立場に立って考えてみてください。今まで盲目な人について見てきました。盲目だった人は、いやされるまで文字どおり何も見たことがありませんでした。生まれた時から真っ暗で、絶望の中に置かれて、物乞いをしながら貧しく生きてきました。当然教育も受けたことはありません。またこの当時、深刻な病や痛みの原因は、本人もしくは両親の罪にあると考えられていましたから、周りの多くの者たちは彼にあわれみの目ではなく、非難の目を向けていたのです。そのようにして彼は生涯にわたって苦しみ続けてきました。そしてある日いやされたのです。でもいやされた直後に、民のリーダーである宗教家たちから、私たちに賛同するようにと執拗に脅されました。恐れを抱いてもおかしくなかったでしょう。またこれに加えて、もしここで彼がイエス様は救い主です、イエス様はキリストですと告白すれば、そこには大きなリスクも伴いました。彼の両親が出てきましたけれども、彼の両親も非常な恐れを抱いていました。22節に「……すでにユダヤ人たちは、イエスをキリストであると告白する者があれば、その者を会堂から追放すると決めていたからである。」と書いていました。。両親たちはこの「会堂から追放」されるということに対して非常な恐れを抱きました。今の私たちには、その恐怖がいまいち理解できないでしょう。でもこの当時の人たちにとって、会堂から追放されるということはある意味で死を連想させるものでした。

聖書注解者のひとり、ウィリアム・バークレーがこんな説明をしています。「破門には二つの種類があった。一つはケレムと呼ばれるもので、これは人を生涯にわたって会堂から追放する厳しい処分であった。この場合、その人は公的にのけ者扱いされ、人々の前で呪われ、神からも社会からも断ち切られることになる。もう一つは一時的な破門であり、これは1ヶ月、あるいは一定の期間にわたって科されるものであった。このような状況の恐ろしさは、ユダヤ人にとってそれが単に会堂から締め出されることにとどまらず、神からも締め出されることを意味すると受け取られていた点にある。」と。想像できますか？盲目だった人は生まれてからその生涯、暗やみの中でひとり孤独に生きてきました。そしてある日、両親の顔も友の顔も見えるようになって喜んでいたのはつかの間、会堂から追放される危険性が出てきたの

です。もし会堂から追放されれば、社会から孤立し、仕事を失い、宗教的にも切り離され、そして再び孤独を味わう恐れが現実のものとして存在していたのです。彼の心を恐れで支配させる要素は、たくさんそこに存在していました。でも彼は、その恐れに屈することはありませんでした。実際に奇蹟を体験した彼は、自分にあわれみを示して下さった方をあかしすることに勇敢であり続けたのです。

続き 25 - 29 節のところに、彼の大胆さがはっきりと表されています。「:25 彼は答えた。「あの方が罪人かどうか、私は知りません。ただ一つのことだけ知っています。私は盲目であったのに、今は見えるということです。」:26 そこで彼らは言った。「あの人はおまえに何をしたのか。どのようにしてその目をあけたのか。」:27 彼は答えた。「もうお話ししたのですが、あなたがたは聞いてくれませんでした。なぜもう一度聞こうとするのです。あなたがたも、あの方の弟子になりたいのですか。」:28 彼らは彼をののしって言った。「おまえもあの方の弟子だ。しかし私たちはモーセの弟子だ。」:29 私たちは、神がモーセにお話しになったことは知っている。しかし、あの方については、どこから来たのか知らないのだ。」と。真理を受け入れる気がなかったパリサイ人は、彼が何を言わんとしても耳を閉じて、そして次第に彼のことを罵り始めました。容易に想像できます。盲目だったそのひとりの人を取り囲んで、彼らは口々に悪口を浴びせ続けました。お前には何の学もない、聖書すら読んだこともない、私たちは聖書に精通している者です。罪に汚れているおまえがモーセの弟子である私たちに対して口応えするのですか、お前のことなどすぐに会堂から追放することができるのですと。見えるようになったその直後、彼が置かれた状況は、間違いなく苦しいものでした。圧力に折れて妥協してもおかしくない状況でした。それでも彼は変わらず自分に光を与えてくれた方をあかしし続けようとしたのです。

いったいどうしてこんな態度が取れたのでしょうか。言えるのは、彼は自分をいやしてくれたイエス様が特別な方であるということに気づいていたからでした。盲人だった彼は、この時点でイエス様についてすべてのことを知っていたわけではありません。イエス様と直接触れ合ったのはほんのわずかでした。それでも彼は自分にあわれみを示してくれ、光を与えてくれた方が神から遣わされた存在だと気づいていたのです。続きにこう書いていました。彼自身の証言が 30 節からこう言われています。「:30 彼は答えて言った。「これは、驚きました。あなたがたは、あの方がどこから来られたのか、ご存じないと言う。しかし、あの方は私の目をおあけになったのです。」:31 神は、罪人の言うことはお聞きになりません。しかし、だれでも神を敬い、そのみこころを行うなら、神はその人の言うことを聞いてくださると、私たちは知っています。」:32 盲目に生まれついた者の目をあけた者があるなどとは、昔から聞いたこともありません。」:33 もしあの方が神から出られるのでなかったら、何もできないはずですよ。」と。皮肉ですね、見えていた人たちはかたくなに真理を見ることができず、盲目だった人は真理を見ることがになりました。暗やみから助け出された大きなその喜びのゆえに、彼は光をあかしすることに妥協することはありませんでした。

その結果、34 節に「そして、彼を外に追い出した。」とあります。彼は会堂から追い出されることになりました。軽く書いています。でも軽く考えてはいけません。この瞬間、彼のユダヤ人としての人生は終わったということです。この時から彼は人々から呪われた者とみなされ、そして社会から完全に切り離されることになりました。ある意味で、孤独だった彼はまた孤独に戻ったように思える状況でした。

そしてこんな彼の姿から私たちは大切なことを学ぶことができます。イエス様を信じ従っていくということには大きな犠牲が伴うということです。イエス様のために信仰のあかしを立てるということにはさまざまな闘いが待っているということです。イエス様に従っていくということは簡単なことではありません。イエス様自身も何度も口にされていました。マルコ 8 : 34 - 35 に「:34……だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」:35 いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音とのためにいのちを失う者はそれを救うのです。」と書いてありました。イエス様に従っていくということには、必ず代価が伴いました。親しい関係を失い、人々の間で孤立するかもしれません。でも主に従うために何を手放すことになったとしても、イエス様を手にかけていること

に勝る宝はありませんでした。どんな犠牲を払ったとしても、救い主を個人的に知り、救い主に従っていく喜びに勝るものはありませんでした。それが私たちにも問われるということです。主に従うものは人々の間で孤立するかもしれません。でも同時に希望があります。人々の間で孤立することになったとしても、主に従う者が孤独になることは決してありません。それはどんな時であれ、主がともにいてくださるからです。それが次のすごい場面でした。

3. 礼拝 35-38節

次の場面35-38節ですけれども、三つ目のキーワードは礼拝です。追放された者とあわれみ深いイエス様のやりとりが続きに描かれていました。「:35 イエスは、彼らが彼を追放したことを聞き、彼を見つけ出して言われた。「あなたは人の子を信じますか。」:36 その人は答えた。「主よ。その方はどなたでしょうか。私がお方を信じることができますように。」:37 イエスは彼に言われた。「あなたはその方を見たのです。あなたと話しているのがそれです。」:38 彼は言った。「主よ。私は信じます。」そして彼はイエスを拝した。」と書いています。すごい光景だと思いませんか？盲目だった人は会堂から追放されました。その様子を目にしていた人たちは間違いなく彼のことをさげすんだ白い目で見ていたでしょう。人々は距離を取っていたかもしれません。しかし、そんな彼のもとにイエス様がやって来るのです。彼が求めたからではありません。彼はまだ一度もイエス様の姿を見たことがありませんでした。見たことがなかった彼にはイエス様のことを探すことも不可能でした。しかしそんな彼のことをイエス様が見つけ出されたのです。救い主として来てくださったお方は、確かに罪人を探し、救うことを喜びとされるお方でした。私たちが愛し従っているそのイエス様は、あまりにも優しく、あまりにもあわれみ深いお方でした。私たちはその主とともに生きていくことができます。この方がともにいてくださるのです。

▶「人の子」

そしてそんなイエス様は、彼のことを見つけ出した後、一つの質問をしました。35節で「あなたは人の子を信じますか」と。「人の子」ということばは、もうこれまでも何度か見ました。このことばは、イエス様が自分に対して用いた表現の中で一番多く使われた表現でした。何を意味していたかというところ、イエス様が人として来られた救い主であることを強調すると同時に、イエス様こそが旧約で約束されていた圧倒的力を持つすべての王であることを表すものでした。ダニエル7:13-14に「:13 私がまた、夜の幻を見てみると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。:14 この方に、主権と栄光と国が与えられ、諸民、諸国、諸言語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」と記されていました。イエス様は自分のことをそのようなことばをもって表現しました。そしてそのようなことばをもって彼に尋ねたのです。あなたは人として来た救い主であり、王である「人の子」を信じますかと。問われた彼は正直でした。「人の子」がだれなのか、すぐにはわかりませんでした。だから彼は言ったのです。「主よ。その方はどなたでしょうか。私がお方を信じることができますように。」と。彼は受け入れる態度ができていました。へりくだっていました。だからこそイエス様はそんな彼にはっきりと「あなたと話しているのがそれです」と告げたのです。このことばを耳にした瞬間、彼はどれほどうれしかったでしょう。自分にあわれみを示してくれて、光を与えてくれた方を彼は初めて自分の目で見たのです。生涯苦しみと絶望の中にいた彼を救い出してくださった救い主の御顔を、初めて彼は自分の目で見たのです。見えるようにしてくださった方の御顔を見たのです。

▶「拝した」

喜びにあふれた彼にとれた行動はたった一つしかありませんでした。38節に「主よ。私は信じます。」そして彼はイエスを拝した。」と書いていました。目が開かれた者、イエス様に会って心を変えられた者が取れる最も自然な応答というのは、礼拝することだということです。自分の目が開かれているかどうか、それは自分自身の心に主を礼拝する心があるかどうか、そのことによって吟味することができます。

ここで出てきていた「拝した」ということばには、もともと相手に対して深い恐れや敬意、服従のしるしとして口づけする、そんな意味が含まれていました。そしてここからひざまずいて敬意を表すとか、ひれ伏して礼拝するという形で使われました。この「拝した」というのは、単なる表面的なふるまいの話をしているのではありません。心の伴わない上辺だけの行為を表しているのでもありません。礼拝というのは神様への自分自身の深い恐れと愛、心からの服従を表す行為、行動でした。私たちが日曜日に集まっているのも、日々の生活の中でする礼拝も同じです。私たちは形を求めるのではありません。神様への自分自身の深い恐れと愛を、心からの服従というものを常に表し続けようとするのです。

盲目だった人は見えるようになりました。見えるようになったことの大きな喜び、感謝のゆえに、イエス様の前にもうすぐにひざまずいて、この方への敬意と愛を喜んで表しました。では今の私たちはどうでしょう。イエス様によって救われたのであれば、イエス様への賛美が日々増し加わっているでしょうか。この方が成し遂げてくださった救いのわざを知ったのであれば、暗やみから贖い出されたことの喜びを知ったのであれば、日々そのことに対する感謝が増し加わっているでしょうか。それとも盲目だった自分の以前の姿を忘れて、いつの間にか礼拝が形だけの、上辺だけのものになってはいないでしょうか。もし熱意を失っているのであれば、あわれみ深いイエス様が私たちの代わりに何をあの十字架でなしてくださったのかを思い出すことです。見えなかった、希望のなかった私たちが、どのようにして見えるようになったかを思い出し続けることです。そしてそれに心を留めて、この方を心から礼拝し続けることです。それが見えるようになった者にとって最も自然な応答、生き方でした。

4. さばき 39-41節

そして最後、四つ目の場面を考える上で、鍵となることばはさばきです。イエス様はこんなことばをもって締めくくっていました。39節からこう書いています。「:39 そこで、イエスは言われた。「わたしはさばきのためにこの世に来ました。それは、目の見えない者が見えるようになり、見える者が盲目となるためです。」:40 パリサイ人の中でイエスとともにいた人々が、このことを聞いて、イエスに言った。「私たちも盲目なのですか。」:41 イエスは彼らに言われた。「もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなかったでしょう。しかし、あなたがたは今、『私たちは目が見える』と言っています。あなたがたの罪は残るのです。」と。もしかすると、39節の最初の部分を読んで、首をかしげた人もいるかもしれません。39節の初めに、イエス様は世をさばくために来たと言われていました。でも遡ってヨハネ3:17では「御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるため」と言われていました。一見矛盾にも思えるような箇所になるのですけれども、聖書に誤りがあるのではありません。皆さんがよくご存じのとおり、イエス様は確かに、一度目救いのためにこの世に来られました。罪人を救うというその目的、その務めを果たすために、この方は世の光としてこの地上に来られました。光によって照らされて、自分自身の罪深さを知り、悔い改めて救い主を信じた者はだれであれ罪の赦しを与えられたのです。そしてこの救いは今でも与えられています。

でも同時に、光に照らされても自分の罪を一向に認めようとせず、暗やみを愛し続けるような者には、その選択ゆえにさばきもたらされました。今回の箇所は、救いがあるところにはそれを拒み続ける者へのさばきが常に存在していることを強調していたに過ぎないのです。ウォーレン・ワーズビーというひとりの先生も、次のように言いました。「ヨハネ9:39は、ヨハネ3:16-17と矛盾しているのではありません。主が来られた目的は救いでしたが、その来臨の結果として、信じようとしぬ者に裁きもたらされたのです。同じ太陽が、種から美しいものを芽生えさせる一方で、岩の下に隠れる害虫を露わにするようなものです。」と。そして来られた光をかたくなに拒み続けていたのがパリサイ人に代表される多くの宗教家たちでした。

では、なぜ彼らは光を拒み続けたのでしょうか。その答えが、イエス様の最後のことばに明白に表れていました。41節でイエス様はこう言いました。「もしあなたがたが盲目であったなら、あなたがたに罪はなか

ったでしょう。しかし、あなたがたは今、『私たちは目が見える』と言っています。あなたがたの罪は残るのです。」と。彼らの問題はどこにあったのでしょうか。それは彼らの高慢さにありました。彼らは自分たちが目が見えると思っていたのです。本当は自分たちも同じように盲目だと気づいてさえいれば、そこにはまだ罪の赦しというものもありました。しかし彼らはどこまで行っても正しい自分たちには罪からの救いは必要ないと、勝手に思い込んでいたのです。だからこそ彼らはたとえ救い主を目の前にしたとしても、この方を求めることはありませんでした。見えていると思っていた彼らは、実際は盲目だったのです。

そしてここに大切な事実を見て取ることができます。それは救いに欠かせないことは、自分が盲目であるという現実をまず認めることからスタートするということです。自分自身が助けを必要とする存在だと、へりくだってすなおに認めること、それがすべての始まりだったのです。みことばは繰り返し教え続けています。生きているすべての人たちは、今もなおキリストを除いて自分の罪の中に死に、盲目のまま生きているということです。この中にも、キリストを除いて生きている人がいるでしょう。自分には今何の問題もないと思っているかもしれませんが、主に従わなかったとしても、そこには何の結果も伴わないと思いついていて、でもそうなのであれば、どうか気づいてください。あなたの目は見えていません。あわれみ深い神様からの警告を無視し続けしないでください。ヨハネ3：36にはっきりと書かれています。「御子を信じる者は永遠のいのちを持つが、御子に聞き従わない者は、いのちを見ることなく、神の怒りがその上にとどまる。」と。かつてのパリサイ人たちは自分を正しいと思っていました。そしてその結果、現実を見ることはできませんでした。彼らは自分たちの生き方が間違っていないと思っていました。だから自分の生き方を否定するものを受け入れることができませんでした。高慢さはその人の目を曇らせるのです。高慢さが彼らの生き方を、彼らの目から見えなくしていました。チャールズ・スポルジョンもこんなことばを残しています。「私たちの小ささがキリストを妨げるのではなく、むしろ私たちの大きさが妨げるのである。私たちの弱さがキリストを妨げるのではなく、むしろ私たちの強さが妨げるのである。私たちの闇そのものではなく、自分は光を持っていると思いついて、主の力を妨げるのである。」と。

改めて自分に問いかけてみてください。あなたは今自分のことを何者かであるかのように考えてはいないでしょうか。救い主がいなければ、主の恵みがなければ、自分は何者でもないと思いついて、もし自分が盲目なのだと気づかされた人がいるのであれば、まだ希望があります。どうかきょうへりくだって主のあわれみを求めてください。イエス・キリストは盲目な人をその暗やみから救い出すために来てくださったあわれみ深い世の光です。だからこの方を拒むのではなく、この方の前に自分の罪をすべて認めて、自分の救い主、主と信じ、受け入れてください。あわれみ深い救い主を知って、そしてこの方とともに生きていく、それに勝る喜びはありません。それこそが私たちが手にできるすばらしい宝です。どうかそれを知って帰ってください。

また、もうすでに主のあわれみを知った愛する皆さん、忘れてはいけません。私たちはただ主の恵みによって今生かされているだけにすぎません。今私たちが見えるようになったと、今私たちが神様を愛して、イエス様の十字架のすばらしさを賛美して、みことばを喜びとして天に希望を置いて生きていくことができているのは、主が私たちにまず働いてくださって、愛を示してくださっただけにすぎません。見えなかった者が、見えるようになったのであれば、私たちにできることは礼拝することだけです。だからそのみわざを感謝する者として、主をあかしすることにいつも勇敢で、そしてどんな時も心から主を賛美する者として、今週もともに歩んでいきましょう。